コラム

原水爆禁止2013年世界大会・長崎に参加して

阿部正巳

私は、「原水爆禁止世界大会」は、2004年広島大会から2013年の長崎大会まで連続10回参加しています。

「平和の折り鶴の取り組み」については、主に舞鶴で知人、友人に声かけしていくうち、毎年、7月末には数千羽の折り鶴が届けられ、8月に現地へ持参し、慰霊碑に手向けることが慣例となりました。今年は、京都北都信金従組で約2,000羽の折り鶴が集まりました。その中には舞鶴市内のデイサービスセンターに通うお年寄りに協力いただいた約400羽も含まれています。

オリバー・ストーン監督

「現地での平和の学習」については、今回は、8月8日、分科会12「映像のひろば」（長崎市公会堂）に参加し、オリバー・ストーン映画監督とアメリカン大学歴史学ピーター・カズニック准教授の講演を聞く機会を得ました。

「もうひとつのアメリカ史」と題して、NHK-BSで放送されたドキュメンタリーの第3回「原爆投下」を鑑賞し、監督と教授が説明後、質疑応答がありました。

ピーター・カズニック準教授（左端）

監督はベトナム戦争の志願兵として参戦し、除隊後、ニューヨーク大学で映画製作を学び、ベトナム戦争の体験を基に戦争映画「プラトーン」と「７月４日に生まれて」を制作し、2回のアカデミー監督賞を受賞。今回のドキュメンタリーでも原爆投下がいかに非人道的で、不必要であるかを告発しています。

「アメリカの教科書には、原爆投下により100万人の米兵

を救ったと記載されていますが、アメリカの歴史学者の間では原爆投下は不必要であったという学説が主流です。トルーマン大統領は、軍事的に不必要であり、道義的に正当化できないにもかかわらず原爆投下を強行しました。」（オリバー・ストーン）

監督と教授はドキュメンタリー10回シリーズを制作、放映し、全米を周り、上映活動を精力的に続けています。

教授は、17年前から毎年8月アメリカの学生たちと広島、長崎を訪問し、被爆者の声に耳を傾けています。

「被爆者は核兵器廃絶に人生を捧げています。そのことを知るべきです。仕返しでも憎しみでもなく、辛い体験を伝えることで人類に貢献しているのです。求めるべきは核兵器廃絶です。」（ピーター・カズニック）

今回の大会で体験したことを職場や折り鶴に協力していただいた方に伝え、核兵器廃絶運動を広げていきたいと思います。（阿部さんは京都北都信金従組書記長です）